

学生の成長を可視化し、  
教育の質保証へつなげるために必要なこと

<話題提供 ③>

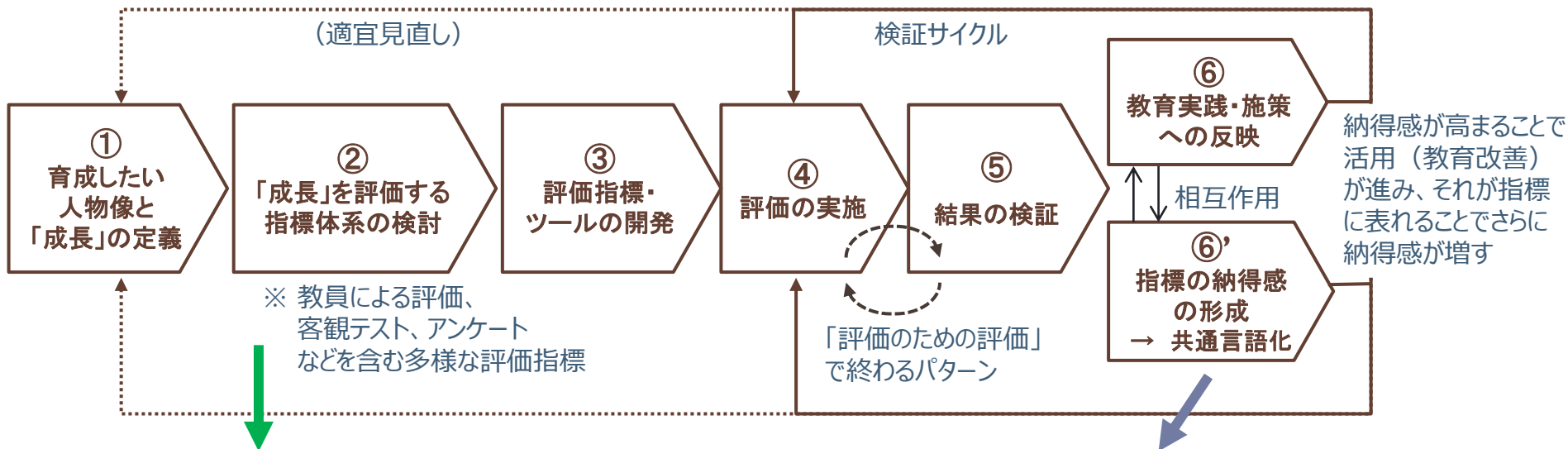
学びと成長の「プロセス」を可視化する意義と  
方法論の構築

ベネッセ教育総合研究所 岡田佐織

s-okada@mail.benesse.co.jp

## 「学修成果の可視化」を機能させるために必要なこと

「学修成果の可視化」のためには、妥当性・信頼性の高い評価ツールを開発することは必要不可欠だが、それだけでは不十分。評価の実施前の「全体設計」と、実施後の「評価結果の読み解き」をいかに深いレベルで実施し、評価結果を活用できるか？が重要（なはず）



**A：評価指標の納得感を高めるために、あらかじめ必要なこと**

### 成長の定義

- ・何を持って「成長した」とするのかの定義とイメージの共有
- ・育成したい人物像の明確化

### 指標の体系化

- ・何の情報をついつ・どうやって取得するのかの設計
- ・指標間の関連をどのように想定するのかの検討（指標の構造化）

**B：指標の納得感を構成するもの**

### 腹落ち感

- ・学生の成長の姿を反映しているか？
- ・カリキュラムの特徴や教育成果を反映しているか？

### 肌感覚の蓄積

- ・指標のどこに、何が反映されるのか？
- ・指標の高低は何を意味するのか？

### 役立ち感

- ・改善のために、何をどうしたらいいのか？

⇒ 各大学で、学修成果の評価方針（アセスメント・ポリシー）と評価指標の体系を設定し、様々な評価ツールに基づく評価結果を、その評価指標体系の中に紐づけていく必要がある。

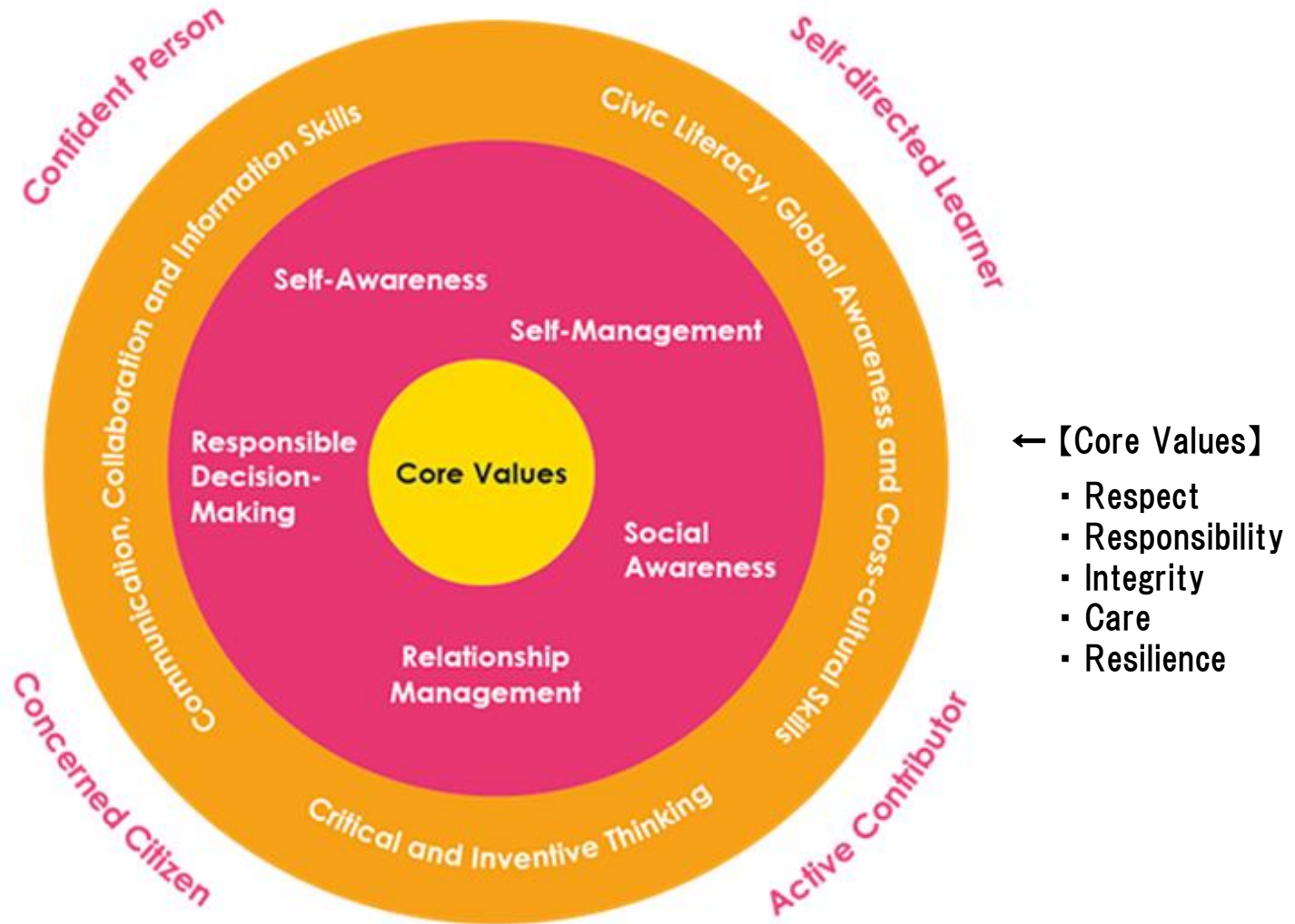
上記のステップ①から丁寧に作っていき、機能する「学修成果の可視化」に挑戦（共同研究の狙い）

それでは、

## 育成したい人物像と「成長」の定義

とは……？

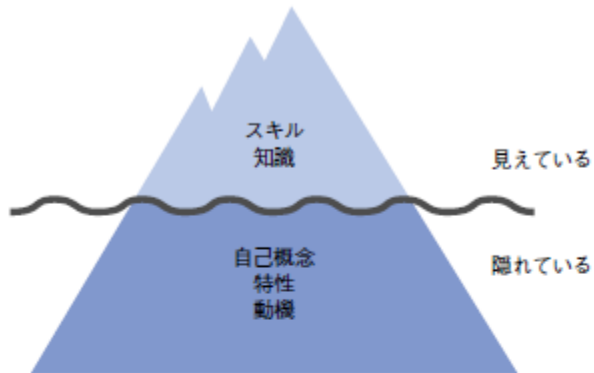


Framework for 21<sup>st</sup> Century Competencies and Student Outcomes

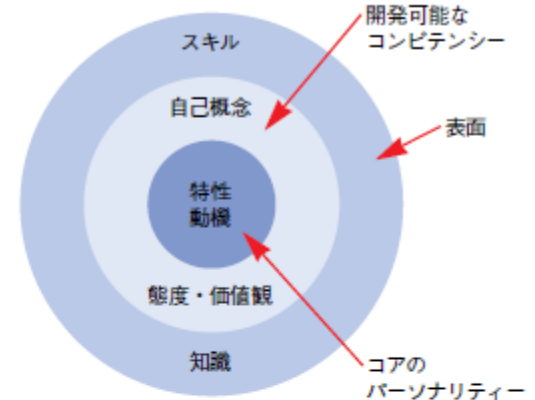
出典：シンガポール教育省による、人材育成目標のフレームワーク

<https://www.moe.gov.sg/education/education-system/21st-century-competencies>

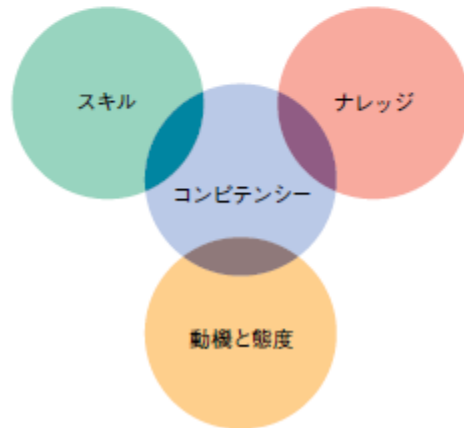
【図表4】スペンサーの氷山モデル



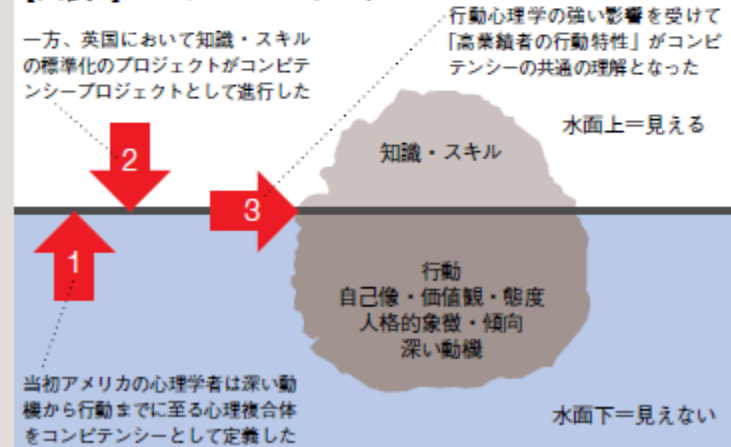
【図表5】ボヤティズのコンピテンシー概念図



【図表6】スクノーバーのモデル

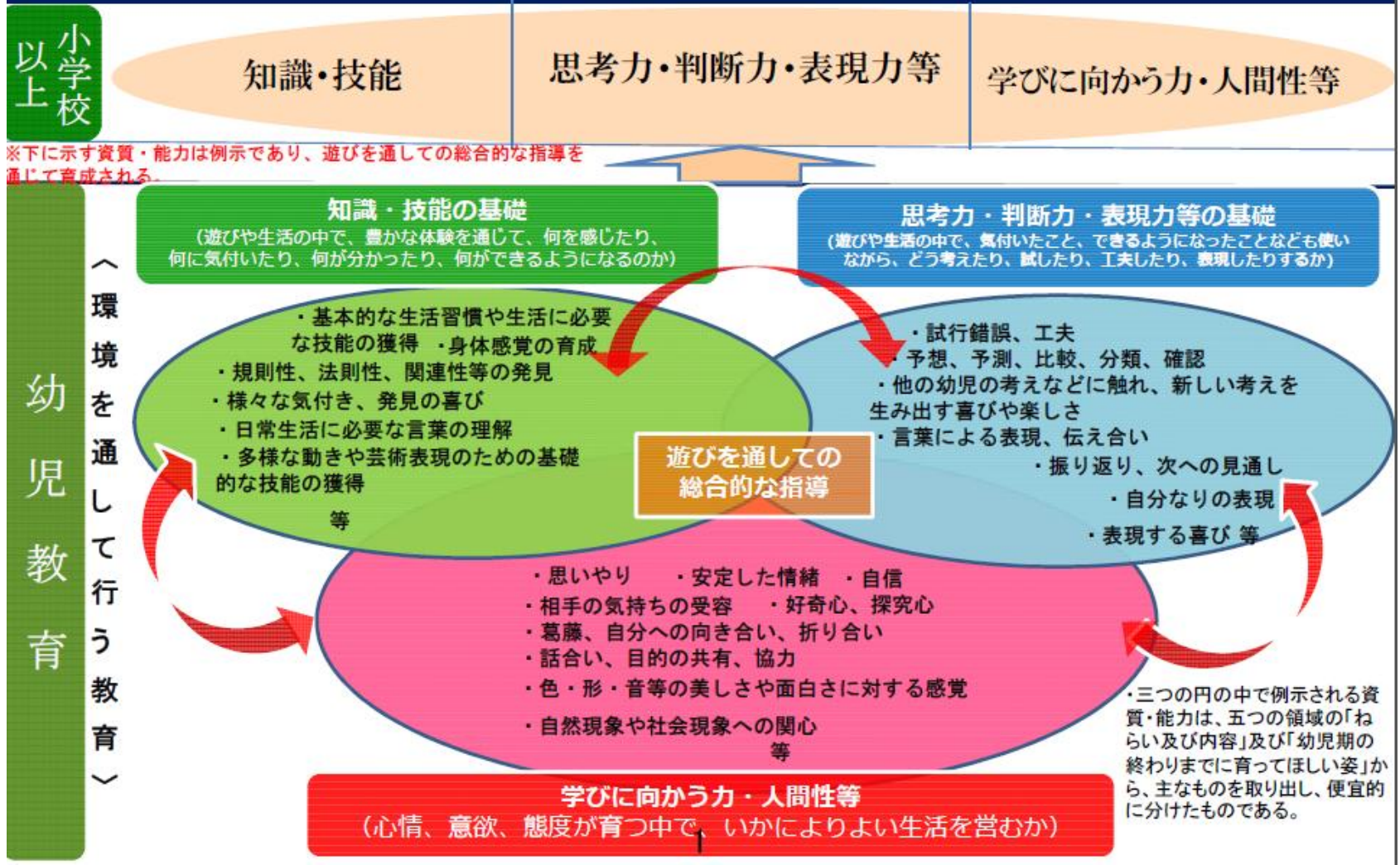


【図表7】マーサのコンピテンシー



幼児教育において育みたい資質・能力の整理

別添 1



## 「学修成果の可視化」の課題 その①

能力要素および要素間の関係を  
どのように捉え、表現するか？





能力を見取る観点ができたとしても、それだけでは「できていないとき、どうしたらいいか」(打ち手)がわからない。

## 「学修成果の可視化」の課題 その②

「打ち手」につなげるためには、

**プロセス&因果関係の解明**(どこに課題があるのか)と  
**環境・周囲の支援との関係の整理**が必要。

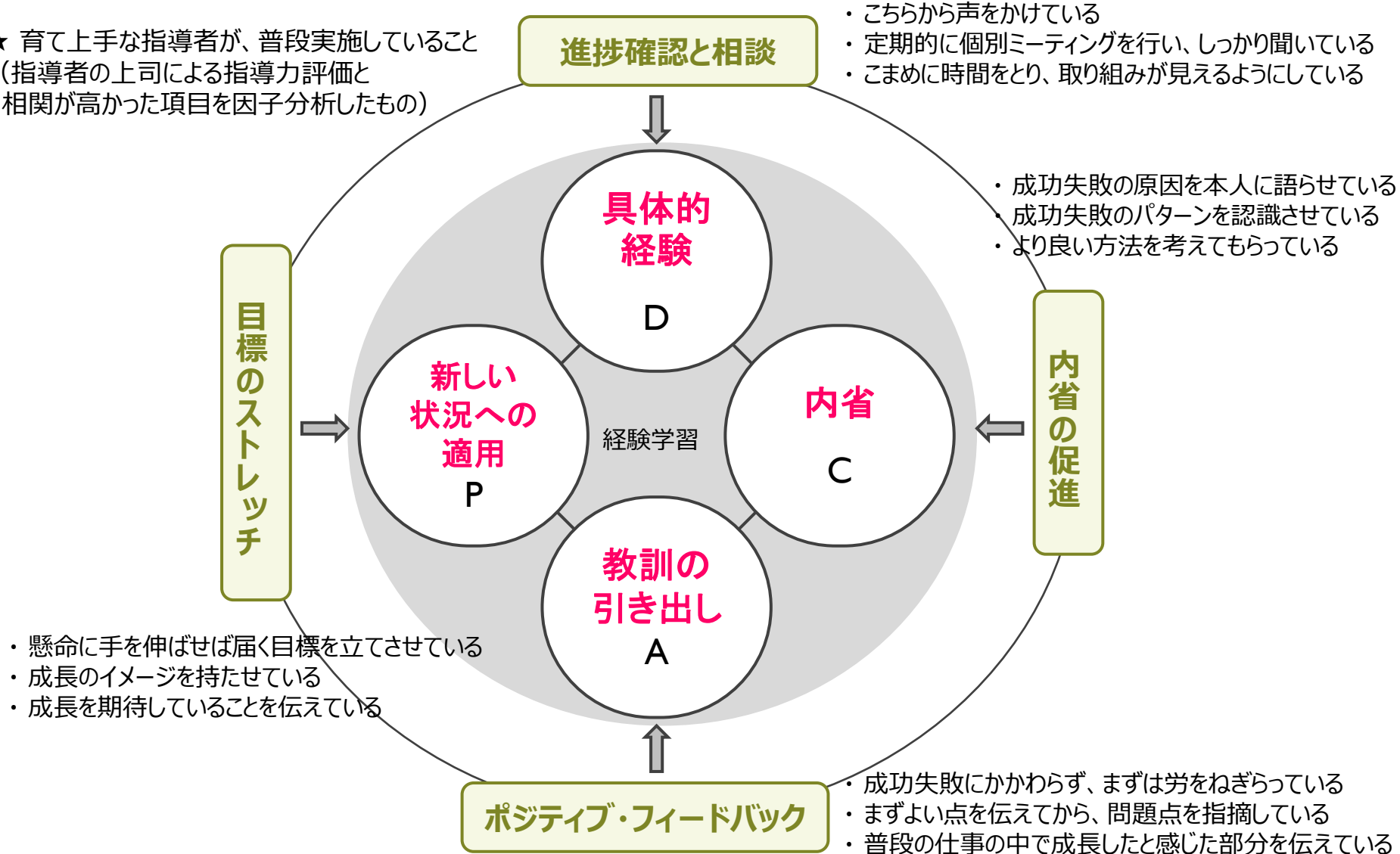
これをどう表現するか？

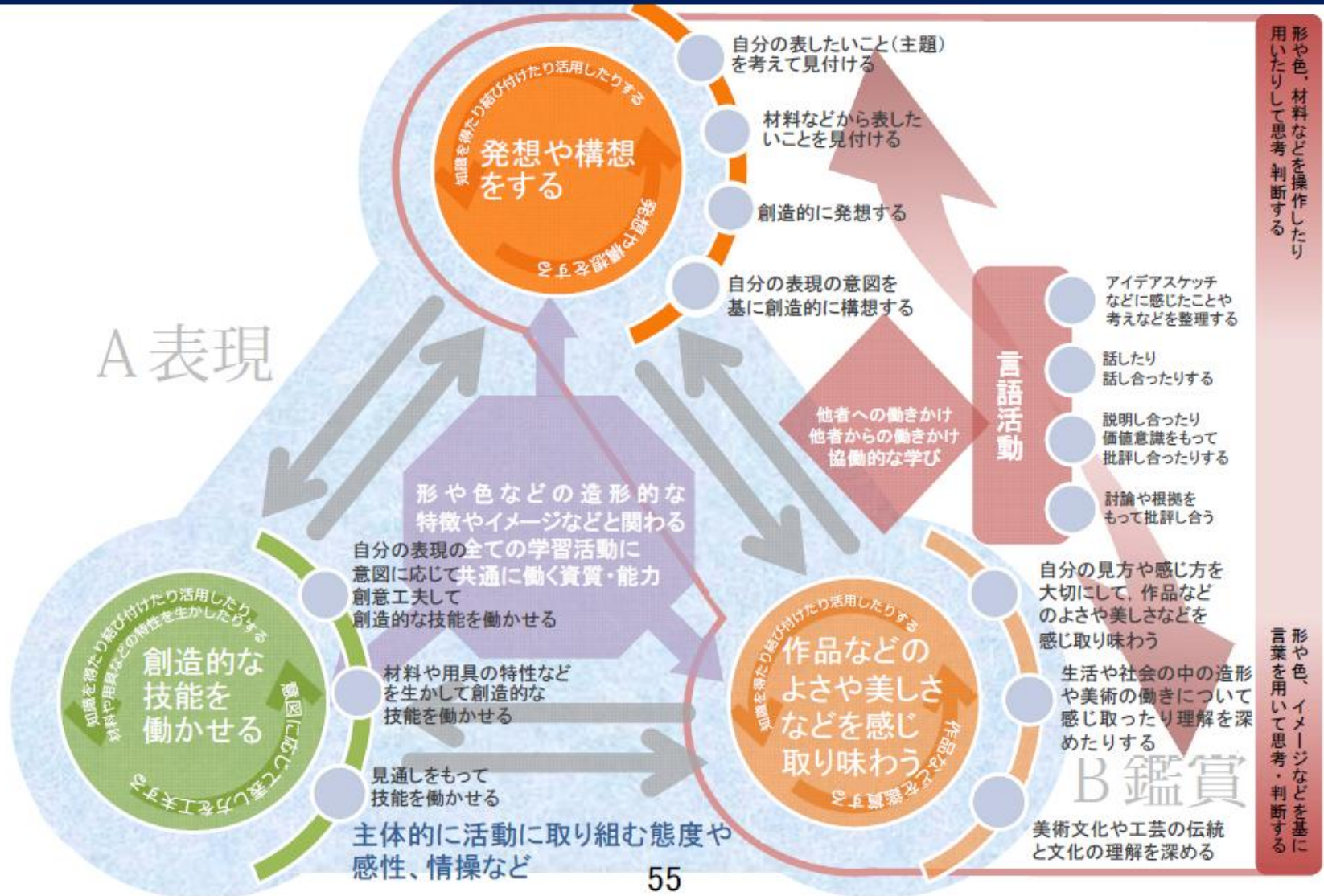




## 育て上手な指導者の指導方法

★ 育て上手な指導者が、普段実施していること  
（指導者の上司による指導力評価と  
相関が高かった項目を因子分析したもの）







プロセス&因果関係の解明や、環境・支援との関係が整理できたとして…

「学修成果の可視化」の課題 その③

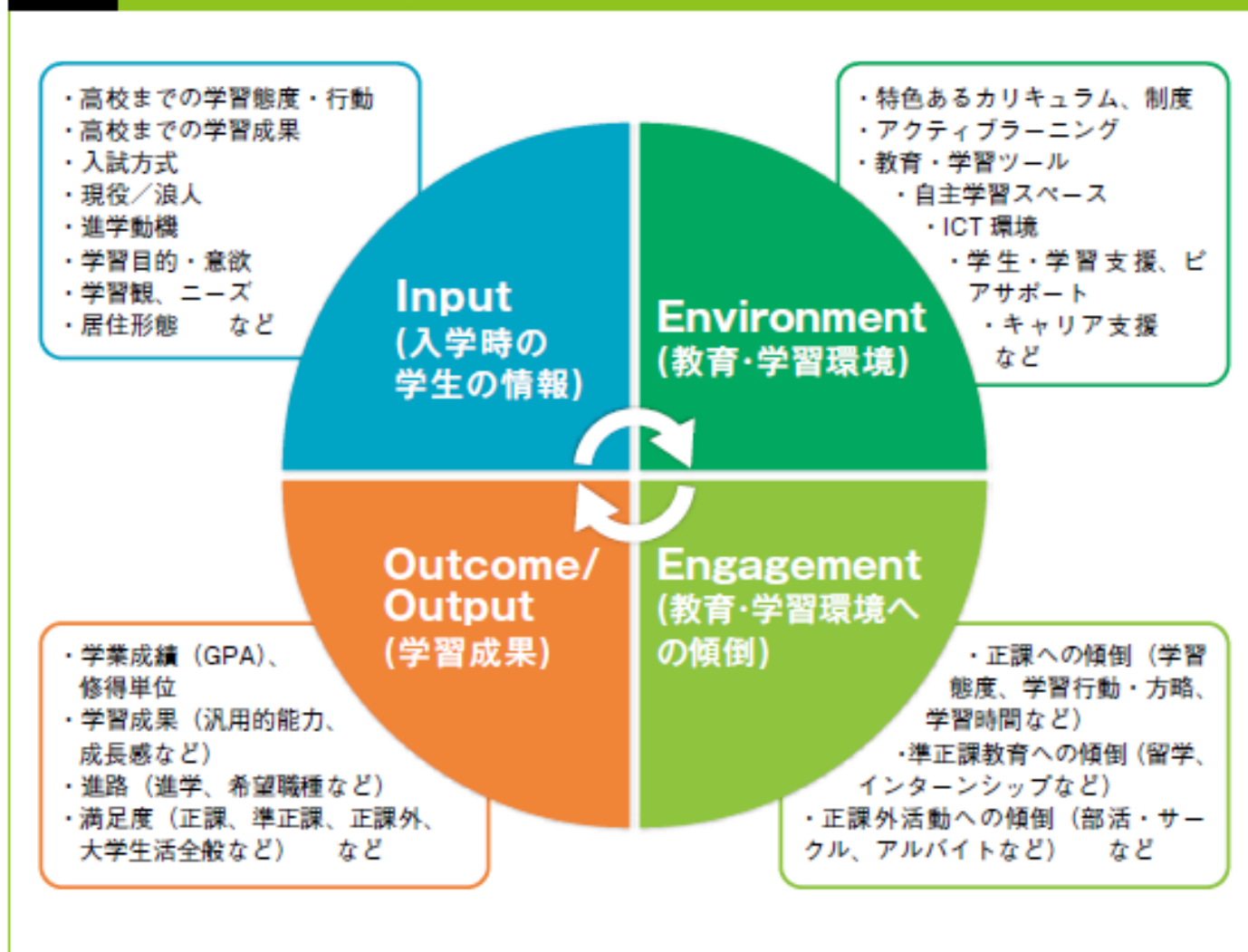
うまくいっているかどうかを知るための  
評価指標をどう設定するか？

プロセス&因果関係に指標を紐づけたモデルが必要



## IEEOモデル（IEOモデルの改良版）

図表1 効果的な学生調査の枠組みと主な項目内容



## BSC(バランス・スコアカード)

&lt;4つの視点&gt;

財務の視点

顧客の視点

業務プロセスの視点

学習と成長の視点

戦略マップ

&lt;凡例&gt;

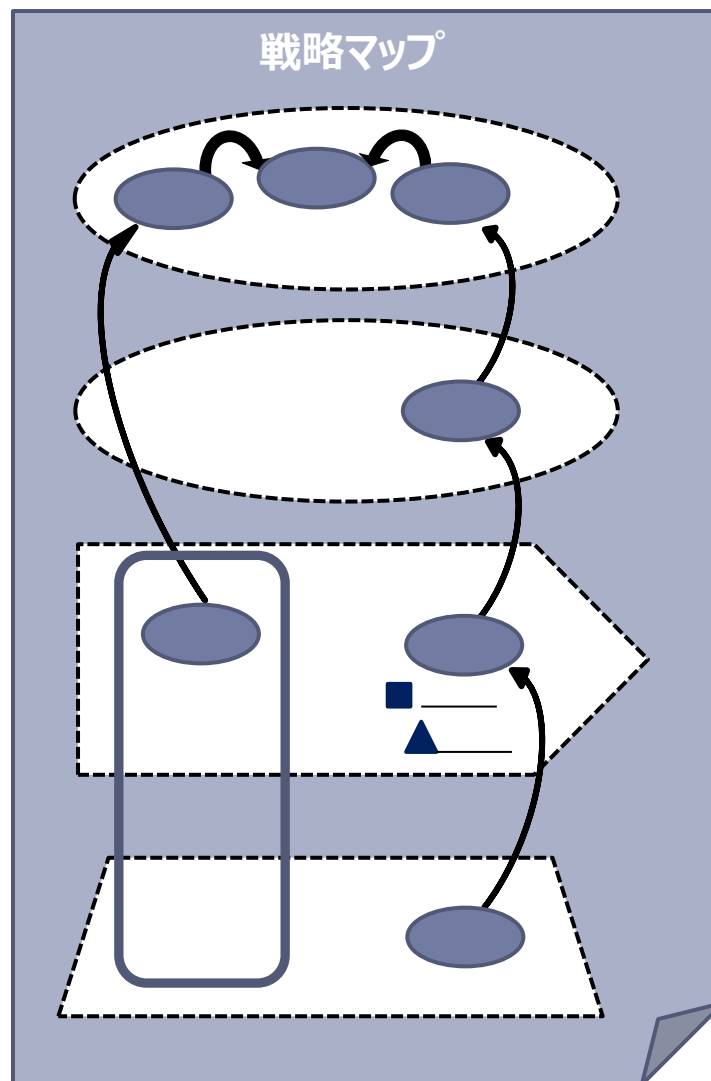
: 視点

: 戦略テーマ

: 戦略目的

: KPI

: 目標値



課題 その① 能力要素および要素間の関係をどのように捉え、表現するか？

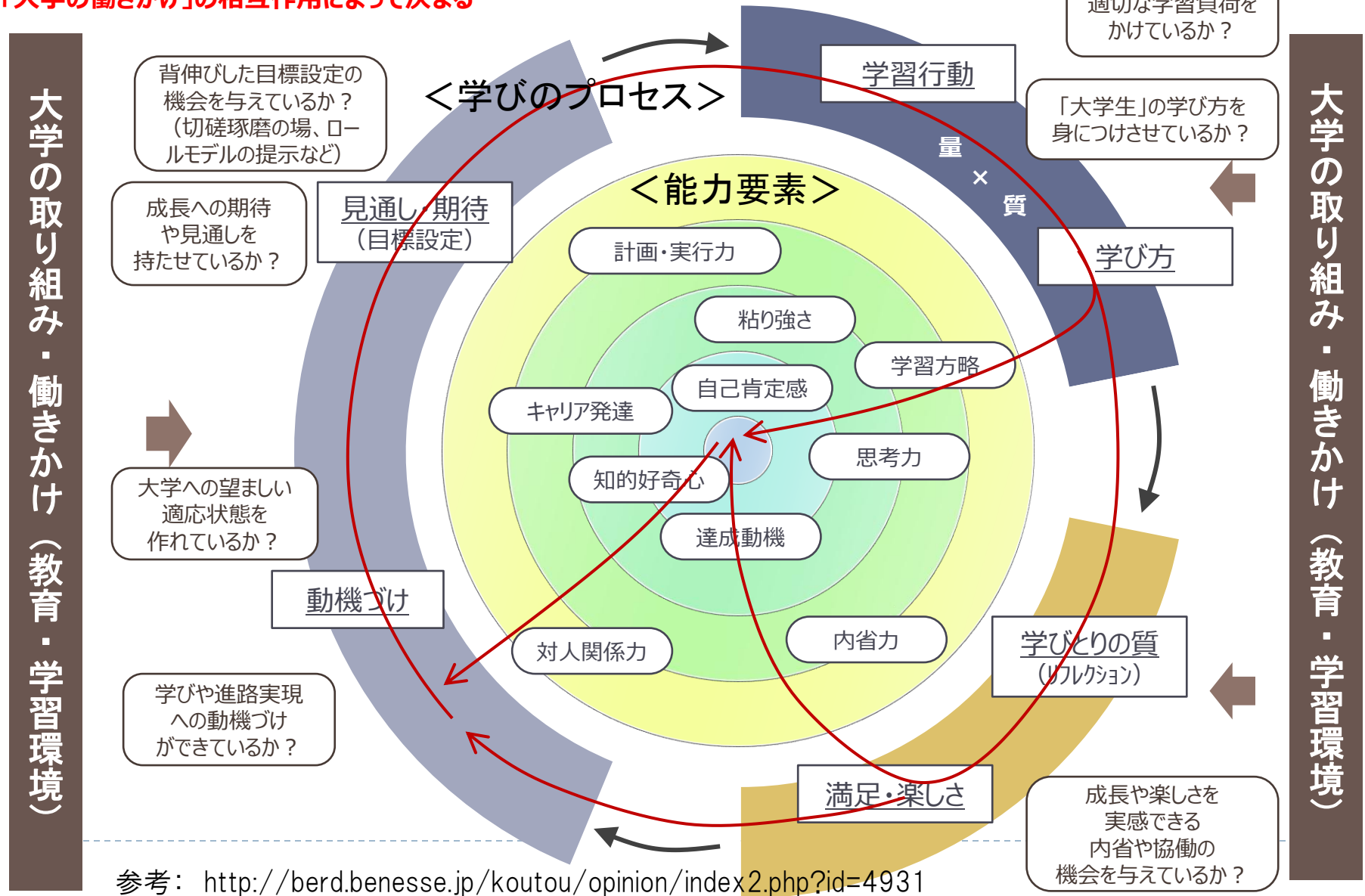
課題 その② 「打ち手」につなげるためには、  
プロセス&因果関係の解明(どこに課題があるのか)と  
環境・周囲の支援との関係の整理が必要。

課題 その③ うまくいっているかどうかを知るための評価指標をどう設定するか？  
(プロセス&因果関係と指標の紐づけ)

これらの課題を乗り越えるために・・・

- ① 能力要素およびそれ以外の要素をレイヤー分けて整理し、
- ② プロセスと因果関係を組み合わせて構造化・モデル化し、
- ③ 要素と評価指標の紐付を行ってみた。

サイクル（学びのプロセス）がうまく回るかどうかは、「本人の状態（能力・スキルレベルと意識）」と「大学の働きかけ」の相互作用によって決まる





## モデルへの反応

「話としては理解できる」

「アセスメントの測定内容の説明としては納得できる」

でも...「もっとシンプルにしないと、実践には使えない」

作った本人以外は使えない・・・？

それでは、一緒につくるところから始めよう。

ということで、

飛躍的に成長中と思われる学生へのインタビューをもとに、帰納的に、「すごい学生は何がすごいのか？」を言語化。



共通する要素を取り出してみた(関東学院大学)





インタビュー調査をもとに、多くの学生の語りの中で出てきた要素を抽出した。

### トリガー = 成長のきっかけ

- 自己認識を深める機会  
(何かに打ち込む、価値観の対立を経験する、など)
- 人生の意味を考える契機  
(友人の病気、身近な人の死など)
- 親の働く姿、生き方・考え方に触れる機会
- 困難を乗り越えた経験
- 役割を任された経験  
(部活・受験・アルバイトなど)
- 困難なときに支えてくれる人がいた  
(友人・親・先生など)
- すごいと思える人が身近にいた  
(友人・先輩・親など)
- 学習をサポートしてくれる人がいた  
(学校・塾・支援室の先生など)
- よい授業、先生との出会い  
(学ぶ楽しさ、科目間のつながりを見せてくれた)
- 高校と大学の学習スタイルの違いを認識する機会  
(テスト・レポート、失敗経験など)

### レディネス = 成長のための土台(能力要素)

※同じ場においても、「成長」に至るかどうかの違いを生む要因

#### 自己の確立

- 自己理解ができている(得意、好き、価値観など)
- ロールモデルやキャリアビジョンの存在

#### やり抜く力・ストレス耐性

- 失敗を恐れず挑戦する
- 困難に直面してもくじげない  
(自信・しなやかさ・粘り強さ)

#### 対人関係力・柔軟性・コミュニケーション力

- 他者と一緒に学べる ・感謝できる
- 他者から刺激や情報を得る
- 助言や忠告を受け止められる

#### 内省力・メタ認知力・語彙力・言語化力

- PDCA を回すことができる
- 深く学ぶことができる、経験から学べる

#### 学習スキル・統合的に学ぶ楽しさの理解

- 問いを立てて情報を集めて論じる、という大学型の学びに適應できる

### 「成長」に向かう姿 (成長の定義)

#### 中・長期の目標設定

- 将来、こうなりたいという目標がある

#### 行動の質と量

##### 焦点化

- 伸ばすべき力を意識している
- 何かに挑戦している、自分に意識的に負荷をかけている

##### 行動

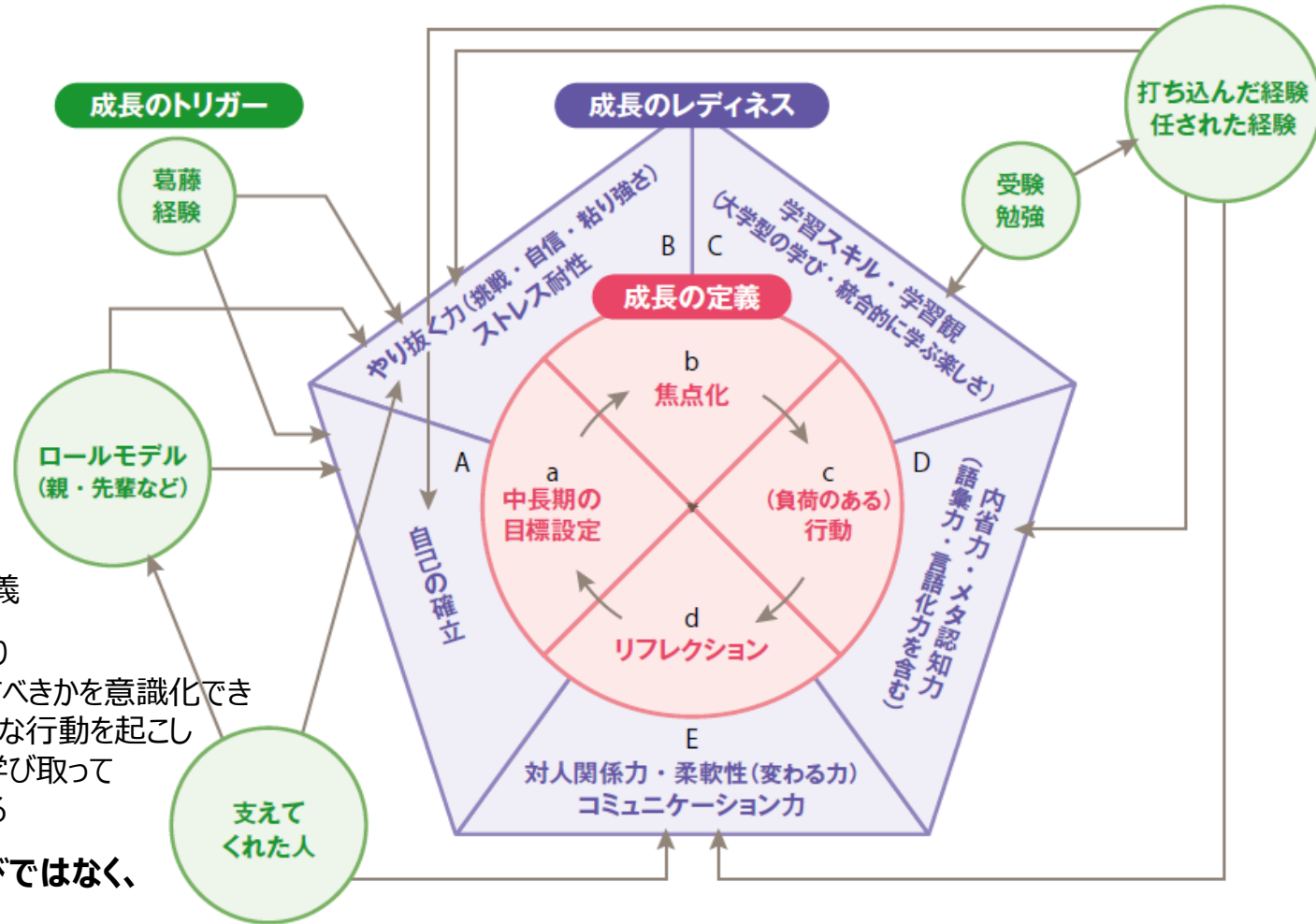
- 目標の達成に向けて、具体的な行動がある
- 負荷の高い行動を継続できている

##### リフレクション

(言語化・意味づけ)

- 自分の成長や、経験から何を学んだかを語ることができる

## 「成長」プロセスに 共通する要素の構造図



〈成長に向かう姿〉

= 本研究における「成長」の定義

- (a) 将来にむけた目標設定があり
- (b) そこに向けて自分が今何をすべきかを意識化でき
- (c) 目標の実現に向けて具体的な行動を起こし
- (d) その行動の結果から何かを学び取って
- (a) 次の目標設定につなげている

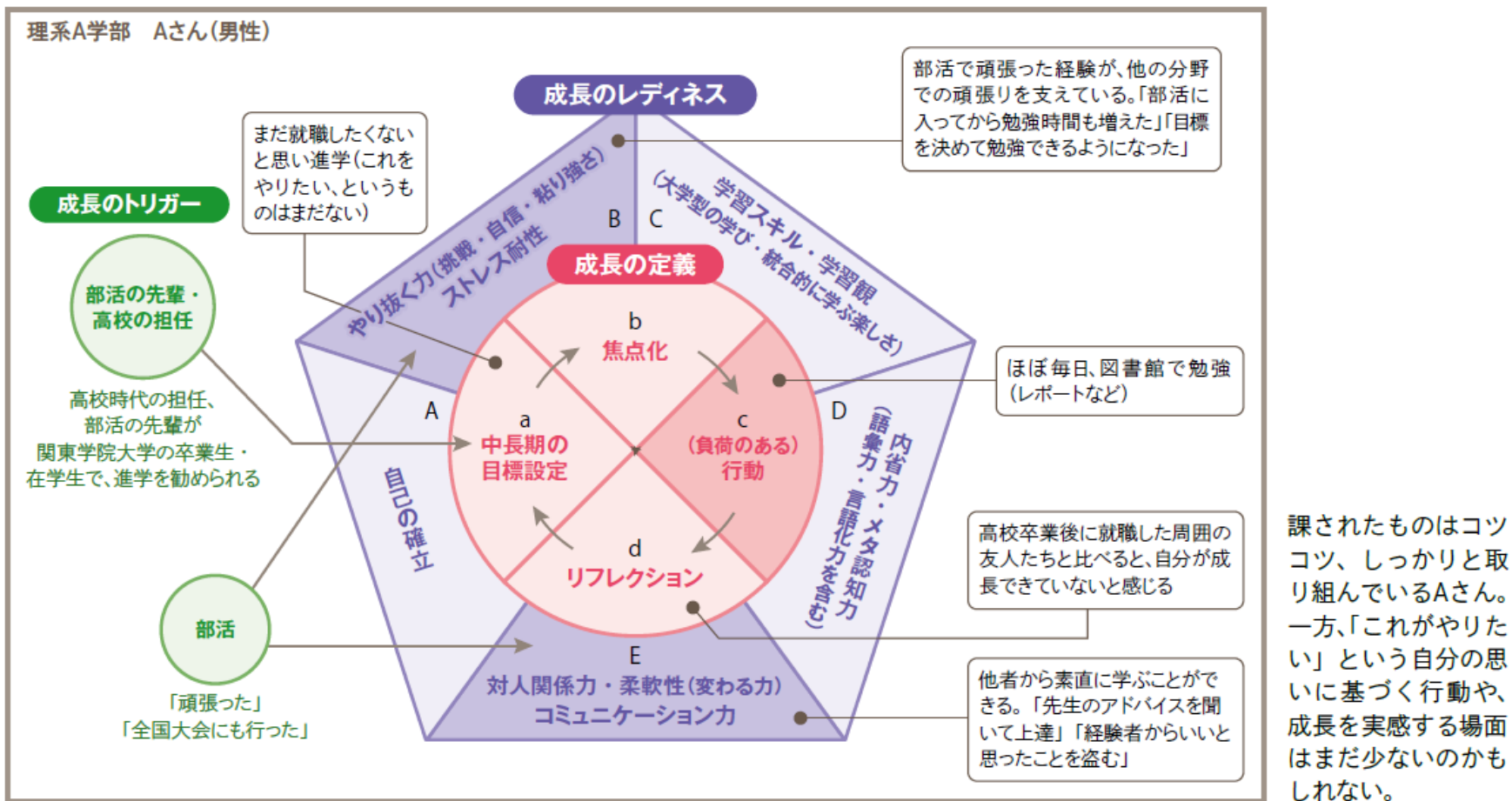
→ 「成長」を能力水準の伸びではなく、  
「状態」として定義

### 「成長のレディネス」の意味

- ① 成長に向かう姿（成長の定義）を実現するために必要な要素（a～dを支える要素）
- ② 経験や出来事、与えられた環境を「トリガー」（成長の契機）として機能させるために必要な力  
= 経験、出来事、環境に意味づけをして成長行動へとつなげる力

## 第2次インタビュー調査における「成長」の個人別プロセスモデル（例）

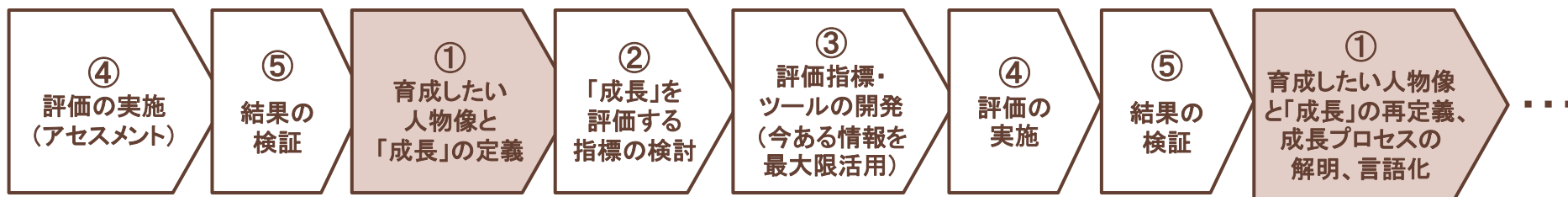
※インタビュー内容をもとに、良い状態にあると考えられる要素に濃い色付けをしている



➡ 観点別に○△×がつけられる、議論ができる

= ざっくりとではあるが、規準 (のりじゅん) と基準 (もとじゅん) を共有できる状態に。

一連の研究プロセスの中で、何をしてきたのか？（振り返り）



行きつ戻りつしながら、共通認識を作りつつあるところ。  
次の課題は、実践にどう生かすか。

★ 池田先生から、共同研究でいただいたコメント

「シンプルに」「意思疎通ができるモデル」

→ 使う場面から逆算してモデル化しないと、結局は使われない？  
網羅性・正しさよりも、使えるかどうか。

では、可視化した結果を、どう使いたいのか？

意思決定・行動選択を支援するもの

予測妥当性に基づく場合分け

→〇〇の場合は××するとよい、が分かるもの

= 評価の結果をもとに、

- ・ 教え手が、何を支援したらよいか分かる
- ・ 学び手が、次に何とすべきかが分かる

スモールステップでフィードバックできる、学生評価の観点を可視化したい。  
意思決定・行動選択の余地がなければ、「見取り」に意味が生じない。

\* アンケート調査でも、取りうる選択肢がなければやっても意味がない  
(それを聞いてどうするの？という状況に。)

「学修成果の可視化」の前に、行動(学習者自身+学習支援者)の選択肢を洗い出す必要あり。

〇〇が～～だったら、私は××する、というリスト。

可視化の方法論開発と、実践の開発はセットになっていなくては機能しない。

- ・ 可視化した先に、何をするのか？
- ・ 何を知りたくて可視化するのか？

をしっかりと議論する必要があるのではないか。



関東学院大学・追手門学院大学のみなさま、いかがでしょうか？  
後でディスカッションしましょう（予告）